

わたしの原風景

9

石津ちひろ

いしづちひろ／絵本作家・詩人



イラスト／石川えりこ

昭和三十年代の、愛媛での話である。わたしが小学一年生のとき、父親がとつぜん、家の敷地内に映画館を建てた。家族にいついっさい相談もせずに、副業で映画館をやり始めたのだ。ただ映画が好きという、それだけの理由で。

姉二人は、さほど映画にのめりこむことはなかった。幼かった弟とわたしの二人だけが、それぞれ、ほぼ毎日のように映画館に足を運ぶようになった。重い扉を押し、分厚いカーテンを開き、劇場の薄暗がりの中に入っていくときに覚えるなんとも言えない感覚を、いまも忘れることができない。扉の向こう側ではいつだって、日常から遠く隔たった夢の世界が待っていてくれるのだ。

この感覚は何かと似ている……と思っていたのだが、はたと気がついた。翻訳を依頼されて初めて絵本の原書を開くとき、映画館の重い扉を押していたときと同様の高揚感を、いつも覚えるのだ。

それにしても、わが家の劇場で観た映画の数々を思い出すと、そのラインナップの豪華さに、思わず目が眩みそうになってくる。そう、わたしはそこで、『羅生門』『生きる』『天国と地獄』『赤ひげ』などの黒澤映画に出会い、『若草物語』『禁じられた遊び』『ローマの休日』といった洋画の名作とも巡り合ったのである。

『生きる』を観ながら、九歳のわたしは人生の悲哀を幼く感じて取った。そして、『禁じられた遊び』を繰り返し観るうちに、フランス語の響きの美しさに魅了され、将来はフランス語を勉強してみたいと願うようになったのだった。

なお、わたしには、回文やアナグラムを（文字に書かないで）頭の中だけで作れるという、あまり役に立たない特技がある。この特技が培われたのは、小学生の頃に映画の字幕をたくさん見ていたからではないか、と主張する人がいるのだが、はたしてどうなのだろう？

いずれにしても、父親の気まぐれがなければ、わたしはいまだに夢の世界の扉を開くようごびを、知らないまままでいたかもしれない。